

<発表要旨1>

ヘラルト・ダーフィット作《カンビュセスの裁き》考

藤村拓也（九州大学大学院博士課程）

かつてブルッへの市庁舎に飾られていたヘラルト・ダーフィット作《カンビュセスの裁き》は、ヘロドトス著『歴史』を起源とする逸話が描かれた作品である。ペルシア王カンビュセスが、賄賂をうけとり不正をはたらいた執政官シザムネスの皮を生きたまま剥ぎ取り、その皮を張った座に、背徳者の息子であり後を継いだオタネスなる人物を坐らせたという残酷な物語が、《シザムネスの捕縛》と《シザムネスの皮剥ぎ》という二対の画中で展開している。

ただし、本作品は徒に残虐性を衒うものではない。このダーフィット作品は、今日「正義図」と呼ばれる類のものであり、不正に対する厳格な裁きの規範を示すと同時に、背信への戒めを目的としている。また以上からうかがえるように、「正義図」は市庁舎や法廷といった執政・司法の場に置かれ、「最後の審判」のような宗教主題の他に、カンビュセスの逸話と同じく、違法行為に対して適法かつ厳粛な処罰が執行されたことを伝える世俗主題が選択された。

一方で、画中に描かれたブルッへの君主フィリップ端麗公夫妻の紋章や、神話の一場面を表した浮彫からうかがえるように、ダーフィット作《カンビュセスの裁き》には一般的な「正義図」とは別の、特別な意味内容が付与されている可能性が指摘されている。さらに研究を複雑なものにしている要因として、市当局からダーフィットへの三回にわたる支払記録、科学調査によって明らかとなった下図と完成作品の違い、画中に記された完成年1498年前後のブルッへをめぐる複雑な状況等が挙げられよう。

本発表では先達によって詳らかにされている図像解釈や支払記録の検討、ブルッへの歴史的・社会的コンテクストの諸相を鑑みつつも、ダーフィット作《カンビュセスの裁き》研究の中で看過されてきたある細部が、本作品の解釈において極めて重要な意味をもちうることを指摘したい。それは《シザムネスの皮剥ぎ》最奥部に描かれた壁外に広がる木立である。

一見すると、この細部は都市空間外部の自然景のようである。しかし精察すると、木蔭には牡鹿が憩い、さらにその奥は塔のある壁で閉じられていることが確認される。また、この箇所と対応する《シザムネスの捕縛》の最奥部に描かれた建築物に、騎乗した人物の浮彫が認められることにも注意を促したい。

以上をふまえ、あらためてブルッへの地誌を俯瞰したとき、各パネル最奥部のモチーフによって都市で重要な役割を担っていた馬上槍試合団体ゆかりの場が明示、あるいは暗示されている可能性が浮かびあがる。そして、その団体「白き熊」、ブルッへという都市、君主であるフランドル伯という画中に織り込まれた三者の関係性を手がかりに、ヘラルト・ダーフィット作《カンビュセスの裁き》の有するメッセージを考えてみたい。

<発表要旨 2 >

文徵明筆《関山積雪図巻》試論

都甲さやか（九州大学大学院博士課程）

文徵明（1470～1559）は、16世紀呉派文人画壇の中心人物として知られる。その長きにわたる画業のなかで、3年間の北京での任官を終えて間もない1530年代は、最も充実した作品制作を行った時期として、研究者のあいだでも注目されてきた。この時期、文徵明は《松壑飛泉図》（嘉靖10年【1531】、台北故宫博物院蔵）、《石湖清勝図巻》（嘉靖11年【1532】、上海博物館蔵）、《関山積雪図巻》（嘉靖11年【1532】、台北故宫博物院蔵）などの秀作を次々に完成させる。これらの代表作の画風から、積年の古画学習が文徵明自身の画風として結実し、その独自の画境を開いた時期であるともいえるが、その実相についてはこれまで検討されているとはいえない。

本発表では、嘉靖7年（1528）から4年の歳月をかけて制作された《関山積雪図巻》（紙本淡彩、縦26.0cm×横521.9cm）について、絵画表現の特質を探り、その成立背景について考察していく。本作品は、雪に覆われた連山と、そのなかを行く騎驢人物等が描かれている。跋によれば、文徵明が友人の王寵（1494～1533）と、石湖（江蘇省蘇州市）の治平寺に寓していた際に雪が降り、それを共に見ていた王寵に請われて制作したという。しかしながら、画中の景観は実際の石湖周辺のそれと大きく異なっており、過去の雪景山水の様式を利用し、より理想的かつ高潔な文人の精神世界として表出されている。

中国絵画史上、雪景図を得意としたという伝承を持つ画家は多くいるが、文徵明は自跋において、これまで実見してきた画家の雪景図を列挙している。このことは、本作品が過去の画家達による雪景図を念頭においたうえで制作されたものであることを示唆するだけでなく、どの画家の様式を特に意識していたかを考察するうえでの手がかりにもなる。

本作品を考察することで、1530年代を、文徵明の文人画家としての系譜意識が絵画表現における発露をみせた時期として、新たに意味付けることができるのではないかと考える。